

平成 20 年度 看護系学会等社会保険連合研究助成 研究報告要

※2500 字程度

- I. 研究テーマ：「医学的に回復困難と診断された遷延性意識障害および重度障害患者における生活行動の再獲得・QOL 向上を目的にした看護プログラム実践者の育成ならびにエビデンスの集積」
- II. 研究目的：意識障害患者および重度障害者に対する新看護プログラムを実践する施設の拡大をはかり、実践者の育成とともに意識障害からの回復や重度障害からの改善例の集積を目的とした。

III. 研究方法：

1. 看護プログラム実践者の育成

本研究への参加を希望した 7 施設を拠点病院として、技術指導および遷延性意識障害や重度障害患者に対する看護プログラムの実践指導と評価を行った。

- 1) 拠点病院に対する教育：①対象：実施責任者、②期間：2008 年 3 月、③方法：講義（意識障害看護の基礎理論、看護プログラムの説明等）・技術研修（体位変換、起き上がり、トランスファー、腹臥位、用手微振動等）を取り入れた研修を実施した。また、看護プログラムの導入に向けて、各病院の問題点等に関してディスカッションを行った。④結果：研修参加者は 14 名であり、研修の満足度は高かった。また、急性期病棟、回復期リハビリ病棟、療養病棟など各病院の看護プログラム導入に関する問題点を話し合い問題解決に努めた。

- 2) 拠点病院における技術指導：①対象：病棟における看護プログラム実践者、②期間：2008 年 6 月～2009 年 2 月（計 6 回）、③方法：各拠点病院に於いて対象事例のケアを含めた技術研修を行った。④結果：拠点病院の研修の参加者数は計 116 名であった。看護プログラムの実践に関して、家族から同意を得た患者を対象に、ケアやリハビリ方法について実践的な指導を行ったことにより、看護プログラムの実践に対する不安が軽減しモチベーションが高まったという意見が多く聞かれた。

- 3) 看護プログラム実践者育成の評価：拠点病院 7 施設は、経営主体、実施病棟の種類、他部門との協力体制等は全く異なっていたが、各病院に応じた指導および実践方法を指導したことで、各病院 2 事例の実践を行うことができた。看護プログラム実践者の育成に関しては、拠点病院の看護師の遷延性意識障害や重度障害患者に対する生活の再構築を図る看護技術の向上につながり、目標はほぼ達成できたと評価できる。

2. 看護プログラム実践によるエビデンスの集積

- 1) 遷延性意識障害や重度障害患者の看護実践：拠点病院での技術指導後に、意識障害者および重度障害者を対象に看護プログラムを実践した。患者の状態のアセスメント、看護目標、ケアおよび看護プログラムの内容について、拠点病院の看護師とともに検討した。その後、4 週間 1 クールとする看護プログラムを実践し、患者の変化に関する評価を行った。各拠点病院とも、研究期間内に 2 症例を目標に看護実践を行った結果、意識レベルの向上や意思疎通の獲得、身体解放、摂食・嚥下機能、排泄機能に関する向上がほぼ全症例に認められ、寝たきり状態であった遷延性意識障害や重度障害患者の生活の拡大と再構築が図られた。

- 2) 拠点病院における実践報告会：拠点病院で実施した事例に関して、全病院が集まり、また一般参加者も招いての実践事例に関する報告会を実施した。第 1 回報告会（2008 年 11 月）、第 2 回報告会（2009 年 1 月）に行った。また、報告会では、拠点病院の看護師に対する知識および技術の向上を目的に、専門の講師による呼吸療法や摂食・嚥下に関する講演も取り入れ実施した。

- 3) 看護プログラムによるエビデンスの集積の評価：拠点病院 7 施設が 4 週間を 1 クールとする看護プログラムを、計 11 症例に実践した。遷延性意識障害および重度障害患者の意識レベルや表情の変化、発声・発語、嚥下機能等の評価には広南スケールを利用し、さらに関節可動域、臨床所見等の評価を行った結果、ほぼ全症例に変化が認められ、患者の生活の再構築につなげることができた。